

連 載



は じ め の 一 歩



第 24 回

出産の高年齢化と乳幼児精神保健

臼井雅美 Usui Masami

東邦大学健康科学部看護学科教授

出産の高年齢化の現状

日本における少子化は急速に進展し、その背景として晩婚化・晩産化が取り上げられている。現代社会における大学進学率の上昇や働く女性の増加、独身者の意識の変化などから2016(平成28)年の平均初婚年齢は男性31.1歳、女性29.4歳と、1980(昭和55)年から比較すると3~4歳程度上昇し晩婚化が進んでいる¹⁾。付随して、第1子を出産する女性の年齢は高年齢化しており、1980年には第1子出生時の母親の年齢が26.4歳だったのに対し、その30年後の2011(平成23)年には30歳を超え、2016年は30.7歳となっている²⁾。また、35歳以上で第1子を出産した高年初産婦は図1のどおりとなり1980年には2.1%だったものが、2013(平成25)年には20.4%、2016年には21.6%と高年初産婦の割合が増え、近年では5人に1人が35歳以上で出産しているという晩産化が進んできている³⁾。

出産の高年齢化が及ぼす影響

日本産科婦人科学会では35歳以上の初産婦を高年初産婦と定義しているが、高年初産婦は母体自身の老化のために軟産道強靱、妊娠高血圧症候群、分娩時の出血、帝王切開、染色体異常など産科学的な問題が多いことが従来から指摘されている⁴⁾⁻⁷⁾。また、高年初産婦には不妊治療の経験が多く⁵⁾⁷⁾⁸⁾、35歳以上の不妊治療後の出

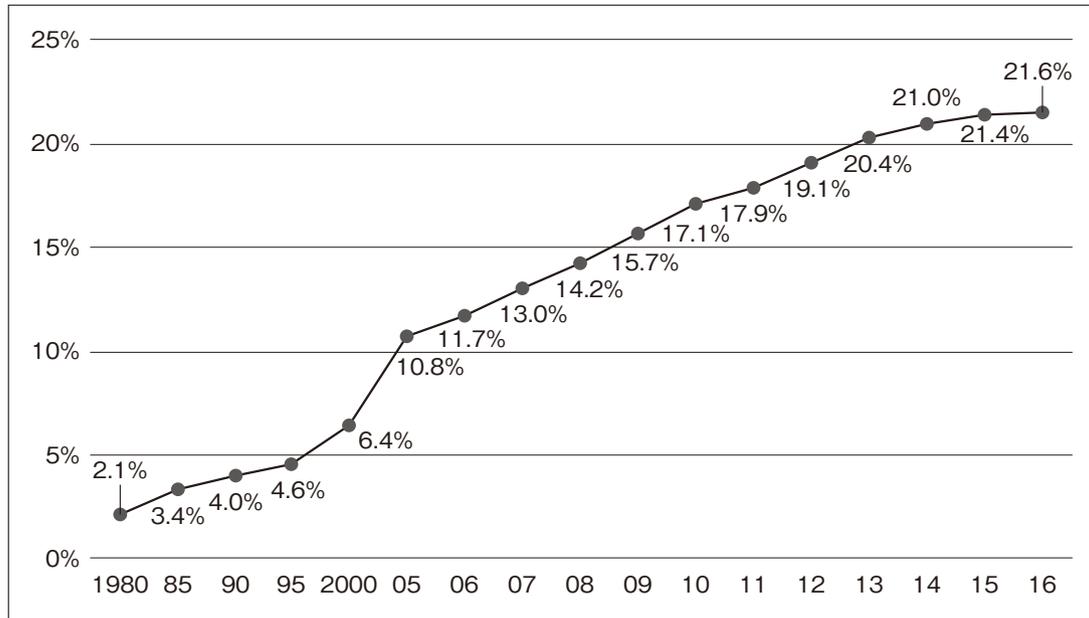
生数は2015(平成27)年では51,001人⁹⁾と全出生数の5.1%に達しており、妊娠・出産に至るまでの治療に対しストレスを抱え、心理的な問題もはらんでいる¹⁰⁾⁻¹³⁾。

高年初産婦となる背景には、晩婚により出産年齢が遅くなったものと、出産年齢を意図的に延ばしていたもの、そして不妊などにより妊娠・出産までに期間を要したものがあ。一般的に高年初産婦は、妊娠・出産・育児への漠然とした不安が多い¹⁴⁾¹⁵⁾といわれている一方、社会的にキャリアを積み自らに自信があるため、落ち着いて妊娠・出産・育児に対応し、さまざまな経験から育児に専念しやすくなっているとも認識されている¹⁵⁾⁻¹⁷⁾。

高年初産婦の心理面に焦点をあてた研究では、高年出産と育児ストレスやうつとの関連、母親役割獲得の困難さなどがあるが、妊産婦のみに着目しており、子どもにどのような影響があるかという研究はほとんどみられない。

筆者らは高年初産婦およびその夫に焦点をあて、子どもとの関係性に着目し、母子相互作用、父子相互作用の観点から縦断的な調査を行った¹⁸⁾¹⁹⁾。母子および父子の親子相互作用についてはBarnardら²⁰⁾のNCATSを用いて母親と子ども、父親と子どもとそれぞれの遊び場面の相互作用についてアセスメントツールを用いて評価した。この尺度は、養育者側に、①子どもから送られるキューに対する感受性(sensitivity to cues)、②子どもの不快な状態に対する反応性(response to distress)、③社会-情緒的発達の促進(social-emotional growth

図1 高年初産婦割合の年次推移



〔厚生労働省：平成28年人口動態統計(確定数)の概況，上巻 出生 第4.6表 母の年齢別にみた年次別出生数・百分率及び出生率(女性人口千対)．2016. より筆者作成〕

fostering), ④認知発達の促進(cognitive growth fostering)の4つの下位尺度, 児側に, ①養育者にするキューの明瞭性(clarity of cues), ②養育者に対する反応性(responsiveness to caregiver)の2つの下位尺度があり, 23項目からなり, 総得点は73点で, 得点の高いほどよい相互作用を意味する。

まず, 高年初産婦と20歳代の初産婦との比較¹⁸⁾では, 高年初産婦は親としての育児に適切な対応のスコアが高い傾向にあり, 20代の初産婦では, 子どもに関する反応および発達のスコアが高い傾向にあることが示され, 高齢初産婦は子どもとより好ましく関係をもとうとする特徴がみられた。しかし, 育児ストレス(PSI)では, 高年初産婦は出産後3カ月における社会的孤立感と子どもに対する過敏性や適応障害, 出産後1年および2年後には親を喜ばせる反応の少なさに対する育児ストレスを抱えていた。

一方, 高年初産婦夫婦と35歳未満の初産婦夫婦との比較¹⁹⁾では, 高年初産婦の夫は出産後4カ月における親のかかわりによる認知発達の促進が有意に高く, また, 子ども側の父子相互作用が良好なことから, 高年初産婦

の夫自身も社会経験の量や質が育児に影響しているのではないかと推測された。

一方, 高年初産婦夫婦は出産後4カ月および1年後において, 気の散りやすさや機嫌の悪さという子どもの情緒面にかかわる育児ストレスを抱えていた。

以上より, 高年初産婦およびその夫は, 出産後もまなくは子どもの情緒面について気にかけてはいるが, 人生のキャリアに裏付けられた精神的・社会的な強みを子育てに生かすことができているのではないかと推測される²¹⁾⁻²³⁾。

高年初産婦に対する育児支援と乳幼児精神保健

厚生労働省は『健やか親子21』の第2次計画として「切れ目ない妊産婦・乳幼児への保健対策の充実」を目標として掲げている²⁴⁾。出産後の高年初産婦の育児に伴う身体的特徴として, 肩こりや腰背部痛, 腱鞘炎が多いと報告され²⁵⁾, 実際に40歳以上の高年初産婦を対象にそのニーズを明らかにした調査²⁶⁾では, 育児による身体的な苦痛や年齢による母乳育児継続の困難性から, 従来の



育児支援ではなく40歳以上という年齢を考慮した育児指導や母乳育児支援を求めており、産後の育児状況を把握した妊娠期からの支援も希望していた。

筆者らの調査において明らかになったように、高年初産婦は産後3~4カ月でも子どもとの関係性に影響を及ぼす育児ストレスを抱えていた。「切れ目ない妊産婦・乳幼児への保健対策の充実」という視点からも産後1カ月までではなく、乳児健診がされる3~4カ月までの支援は必要だと思われる。また、日本における妊娠期の支援プログラムは健康管理や出産準備教育に重点をおいたものが多く、子どもの泣きを含めたサインや行動などに対する支援がまだまだ不足している。

一方、海外においては、母親の年齢にかかわらず、子どもの身体上の問題を抱えている家族や、家庭環境に問題のある乳幼児とその家族を支える研究やサポートシステムが国や地域の政策として重視されてきた。子どもが大きくなってから問題を解決することは困難であるため、早期に母と子を支援することの重要性が乳幼児精神保健の世界では叫ばれており、専門家によるサポートシステムが構築されている。例えば、理論に裏付けられた研究と実践活動として、米国ミネソタ大学で開発したSTEEP (Steps Toward Effective Enjoyable Parenting)²⁷⁾にみられる親子のアタッチメントを基本にした家庭訪問プログラムや、南オーストラリア政府によるCYWHS (The Children, Youth and Women's Health Service, 子どもと若者と女性への健康サービス)家庭訪問モデルがある²⁸⁾。これらのプログラムのなかには、概念として筆者が用いた親子相互作用モデル(Nursing Child Assessment Satellite Training: NCAST)²⁰⁾が入っており、アセスメントツールだけでなく、介入支援としても用いられている。

出産の高年齢化により妊産婦およびその夫たちは、周囲に同年代の育児上の仲間が少なく、子どもに対するイメージがつきづらいことが予測される。そのことから、妊娠期からの育児上の不安などを話し合える仲間づくりや健康管理や出産準備教育に重点をおいた妊娠期の支援プログラムではなく、乳幼児精神保健に着目した早期の家族支援プログラムの作成が急務である。

【文献】

- 厚生労働省：平成28年人口動態統計(確定数)の概況, 上巻 婚姻第9.11表 年次別平均婚姻年齢及び夫妻の年齢差. 2016.
- 厚生労働省：平成28年人口動態統計(確定数)の概況, 上巻 出生第4.19表 出生順位別にみた年次別母の平均年齢. 2016.
- 厚生労働省：平成28年人口動態統計(確定数)の概況, 上巻 出生第4.6表 母の年齢別にみた年次別出生数・百分率及び出生率(女性人口千対). 2016.
- 合阪幸三, 金田幸枝, 鳥谷葉子, 他：高年初産の最近の動向. 産婦人科の実際 40(1): 85-88, 1991.
- 笠井靖代, 尾崎倫子, 山田学, 他：年齢因子は分娩に影響するか. 日本周産期・新生児医学会雑誌 48(3): 585-594, 2012.
- 杉本充弘, 笠井靖代, 尾崎倫子：高年初産における分娩リスクの解析. 産婦人科の実際 61(9): 1359-1368, 2012.
- 栗林ももこ, 笠井靖代, 有馬香織, 他：年齢階層別の妊娠・分娩リスクについての解析. 日本周産期・新生児医学会雑誌 51(3): 1009-1017, 2015.
- 近藤好枝, 今関節子, 行田智子, 他：高年初産における看護問題の検討. 群馬大学医療技術短期大学紀要 14: 69-73, 1993.
- 齋藤英和：平成28年度倫理委員会登録・調査小委員会報告；2015年分の体外受精・胚移植等の臨床実施成績および2017年7月における登録施設名. 日本産科婦人科学会雑誌 69(9): 1841-1850, 2017.
- 千石一雄, 石川睦男：不妊症治療後の妊婦の心理的ケア. ヘリネイタルケア 13巻(春季増刊): 84-88, 1994.
- 深尾千晴, 我部山キヨ子：高度生殖補助医療および一般不妊治療後妊産婦の抑うつ傾向とストレス対処能力の関連；妊娠末期から産後1カ月までの縦断的調査. 日本助産学会誌 28(2): 260-268, 2014.
- Bjerke SE, Vangen S, Nordhagen R, et al: Postpartum depression among Pakistani women in Norway: Prevalence and risk factors. J Matern Neonatal Med 21(12): 889-894, 2008.
- Carolan M: Late motherhood: the experience of parturition for first time mothers aged over 35 years. Aust J Midwifery 16(2): 17-20, 2003.
- 直田幸代, 宮田久枝, 岡部恵子, 他：高齢初産婦の分娩・妊娠に対する認識；滋賀県下の調査を通して. 母性衛生 42(2): 316-323, 2001.
- 永田佳子, 山田舞：妊娠の高年齢化に伴う初産婦の心理状態の変化とそのニーズ 妊娠中期から産後早期までのインタビューを通して. 横浜市立市民病院看護部看護研究集録 平成24年度, 43-48, 2013.
- 伊藤明子, 牛嶋順子, 園田みゆき, 他：高年妊娠のリスクとメリット. ヘリネイタルケア 27(7): 16-20, 2008.
- 國井麻里, 磯山あけみ：高齢初産婦の母親となる過程；産褥早期にある褥婦に焦点をあてて. 茨城県母性衛生学会誌 32: 8-13, 2014.
- Sonobe M, Usui M, Hiroi K, et al: Influence of older primiparity on childbirth, parenting stress, and mother-child interaction. Jpn J Nurs Sci 13(2): 229-239, 2016.
- 白井雅美：出産の高齢化に伴う親子支援モデルの検討. 科学研究費助成事業研究成果報告書(課題番号22610012). 2017. <https://kaken.nii.ac.jp/ja/file/KAKENHI-PROJECT-22610012/22610012seika.pdf> (最終アクセス2017年10月18日)
- Barnard KE: Beginning Rhythms; The emerging process of sleep wake behaviors and self-regulation. NCAST Publications, Washington, 1999, pp 61-65.
- 新村美紀, 小川久貴子：高齢初産婦の産後1カ月までの育児における体験. 日本ウーマンズヘルス学会誌 11(1): 84-91, 2012.

- 22) Sakajo A, Mori E, Maehara K, et al : Older Japanese primiparas' experiences at the time of their post-delivery hospital stay. Int J Nurs Pract 20(Suppl 1) : 9-19, 2014.
- 23) Mori E, Iwata H, Sakajo A, et al : Postpartum experiences of older Japanese primiparas during the first month after childbirth. Int J Nurs Pract 20(Suppl 1) : 20-31, 2014.
- 24) 厚生労働省・健やか親子21 推進協議会：健やか親子21(第2次). <http://www.mhlw.go.jp/file/06-Seisakujouhou-11900000-Koyou-kintoujidoukateikyoku/0000067539.pdf> (最終アクセス2017年10月10日)
- 25) 森恵美：高年初産婦に特化した産後1カ月までの子育て支援ガイドライン. 子育て支援ガイドライン開発研究プロジェクト2014. http://www.n.chiba-u.jp/mamatasu/doc/guidelines_fix.pdf (最終アクセス2017年10月10日)
- 26) 畠山矢住代, 藤城優子, 松井弘美：40歳以上の初産婦が産後1カ月間に受けたサポートと求めるサポート. 母性衛生 56(4) : 523-530, 2016.
- 27) Erickson MF, Egeland B : Linking theory and research to practice ; the Minnesota Longitudinal Study of Parents and Children and STEEP™ program. Clin Psycho 8(1) : 5-9, 2004.
- 28) 廣瀬たい子：看護のための乳幼児精神保健入門. 金剛出版, 東京, 2008.

小児看護

2017年 6 月号

急変予知に向けた院内でのシステムづくり
RRS 導入と看護師の気づきが子どもを救う